図書館だより

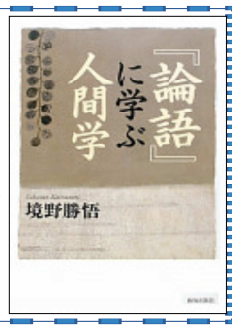
November

読書の秋には本を読もう

秋も深まり紅葉真っ盛りの美しい季節となりました。図書委員会では「読書の秋」に相応しく、恒例の企画を実施します。皆さんに本をたくさん読んでもらいたい…ということで、皆さんに一番身近な本校の先生方に図書を推薦していただきました。先生方からのおすすめ本は、若かりし頃に読んでとても思い出深い本から最近読んでみて面白いと思われた本、またはご自分の教科と関連のある本など様々です。今回の第一弾は、学年に入っていませんが日々お世話になっている先生方からの推薦本です。

中原　昭

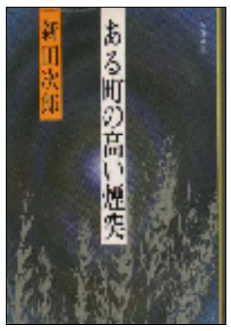
『「論語」に学ぶ人間学』　境野勝悟著　致知出版社



本校で３年連続講演していただいた講師境野先生が出版した３０数冊の中から、私が在校生の皆さんにお薦めしたい本です。『論語』がこんなにも面白く読めるのかと思います。一読あれ。

矢野　正彦

『ある町の高い煙突』　新田次郎著　新潮社



本校図書館から見える大煙突は、日立市の中で特に雄大に見える場所ではないかと思っています。建設当時155.7m。東洋一どころか世界一だったようです。平成５年に倒壊し、現在は、54mになってしまいました。煙突が立てられるまでの人々の苦悩と努力を是非皆さんに知って頂きたいと思います。この当時公害問題は悲劇だけですが、この本を読むと人々が協力して煙害に取り組んだ勇気と意欲に敬意を表したくなります。

齋藤　繁樹

『日本近代史』　坂野潤二著　筑摩書房

明治維新から敗戦に至る日本近代史を一貫した論理でとらえることは専門家でも至難の業である。この困難な課題に取り組み、その成果を一般読者に提供してくれる稀有な学者が坂野潤二氏である。大学を定年退職後も精力的に活動を続け、去年発行された同書は新書サイズながら日本近代史を俯瞰する視座を与えてくれる。

髙槌　倫明

『国語教科書の闇』　川島幸希著　新潮社

歴史教科書問題が一時話題になったが、もう一つの教科書問題があるのをご存じだろうか。それは高校の国語の教科書であるという。本書は明快に問題点を指摘している。何が問題なのか、勉強の合間に読んでみてはいかがだろうか。きっと国語力アップ？間違いなし！

高野　与子

『かぐや姫の物語』　坂口理子著　角川書店

日本最古の物語として誰もがご存知の物語。近くスタジオジブリ制作で映画化されることもあり気になった。今は昔、幼い私が読んだかぐや姫では月の存在が気になり宇宙に興味を抱いた。今回は竹から生まれ美しい女性へと成長し、月へ帰らなければならなかったかぐや姫の心情に思いを寄せた。ますますロードショーが楽しみな今日この頃である。

鈴木　巳代治

『○に近い△を生きる』

鎌田實著　ポプラ社

これからの時代に必要なのは、たった一つの正解ではなく、いろんな生き方があるという。皆と同じ○や×でない、△という自分の『生き方』をみつける事で人生が輝いてくると言っている。ここに紹介されている方々の、柔軟で素敵な素晴らしい生き方に感動して下さい。

御代　昌代

『掃除道～会社が変わる・学校が変わる・社会が変わる～』

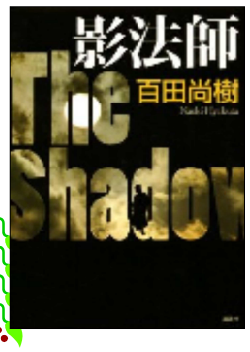
鍵山秀三郎著　ＰＨＰ研究所

『素手でトイレを掃除する』―「なぜ素手で？」と思っている人はぜひ読んでみて下さい。毎年恒例になりました保健・環境委員会のトイレ掃除は、この本をきっかけに始まりました。体験してから読んでみると、より深く素手で掃除する意味が分かると思います。この掃除は私を成長させてくれました。あなたも一度体験してみませんか？

海老沢　宏子

『影法師』　百田尚樹著　　講談社

下級武士から筆頭家老にまで上り詰めた勘一は、頭脳明晰で剣の達人の竹馬の友、彦四郎の行方を追っていた。２人の運命を変えた２０年前の事件。確かな腕を持った彼が負った「卑怯傷」の理由とは。その真相が男の生きざまを映し出す。彼らのように清々しく生きてほしい。心からそう思わせる命の輝きが、この小説にはある。

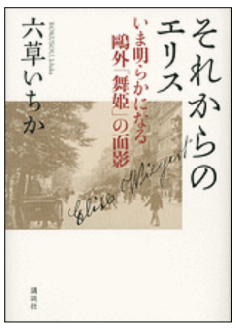


金澤　正和

『それからのエリス』
六草いちか著　　講談社

123年前に森鷗外は『舞姫』を著した。

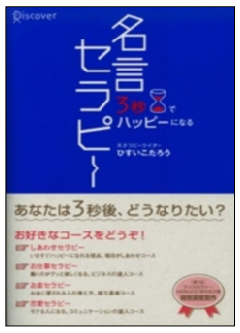
そのヒロイン「エリス」のモデルの身元を突き止めた筆者が、親類に出会う。そして、鷗外の恋人エリーゼの写真を発表したのが本書だ。長く、ベルリンの壁がこの研究を妨げたが、教会の記録から判明する。鷗外はドイツに帰った彼女に手紙を書き送っていたという。文豪の青春の実相は如何。



芦間　雄太

『３秒でハッピーになる名言セラピー』
ひすいこたろう著
ディスカバー21

さらっと読みながら、自然に　心の持ちようをプラスに転換してくれます。いろいろ悩んでいる人、なんとなく気持ちが落ち込んでいる人、ぜひ読んでみてはいかがですか？



後藤　朋幸

『ハプスブルク史研究入門　歴史のラビリンスへの招待』
大津留厚他編　　昭和堂

現在のヨーロッパは、ＥＵを中心に経済・外交面等で統一が進んでいます。その基礎となったのが、ハプスブルク家です。広大な領土・多民族国家・多文化から成る王朝で、ヨーロッパ統合のモデルとなっています。複雑な歴史・民族・言葉・文化・地続きの国土から成る王朝がいかに苦慮して、国家を保った歴史がわかる本です。

大塚　義典

『夢をかなえるサッカーノート』
中村俊輔著　　文芸春秋

元日本代表で世界でも活躍した現横浜-Ｆ・マリノス所属の中村駿介選手が１６歳の時から書き続けてきたサッカーノートを見れる作品。実際におきた成功や苦悩、それを乗り切った時の心境や心構えなど、リアルに心境の変化を書きつづっている作品。是非読んでもらいたい一冊です。

小田倉　佳弘

『働かないアリに意義がある』
長谷川英佑著
メディアファクトリー

アリの行動を観察し続けた研究成果を人間に例えながら平たく説明しています。働き者の代名詞のアリですが、７割もサボっているということ。しかし、怠け者のアリも組織を存続させるためには、実は必要な存在である真実があり、その意義を唱えた一冊です。

照沼　幸香

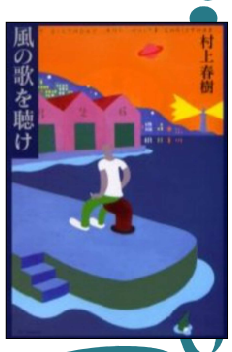
『ガンジス河でバタフライ』
たかのてるこ著　　幻冬舎

初めての海外旅行。あなたなら誰とどこへいきますか？多くの人は友達や家族とリゾート地や、日本語が通じやすい国を選択することでしょう。この本の作者は一人でアジアへ飛び立ちます。一人旅ならではの出逢いの素晴らしさや、人間のたくましさが綴られた一冊です。自分探しの途中で悩んでいる人にお勧めします。

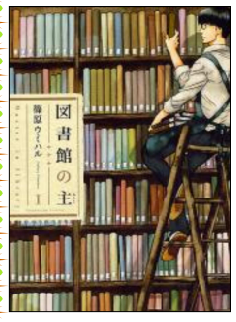
長久保　毅

『風の歌を聴け』
村上春樹著　　新潮社

私がこの本を最初に読んだのは、高校生の時だと思います。その後10回以上は繰り返し読みました。内容は軽く、漫画を読む感覚で気楽に読めます。特に大きな事件や感動が書かれているわけではありません。しかし、ありふれた日常が書かれているからこそ、私はリアリティーを感じます。日本で今一番有名な作家のデビュー作です。



池田　由里子　　**『図書館の主』　篠原ウミハル著　　芳文社**



図書館の仕事に携わって早〇年…。「司書の仕事って面白い？」と質問されることが度々あります。面白い？…いや大変だよ…。日々情報収集し研鑽を積まないとレファレンスに応えられないのですもの。今回ご紹介する本は、コミックですが、そんな研鑽を積んだ名物司書・御子柴のいる児童図書館での物語。ぶっきらぼうで堅物だけど、仕事は一流。彼の選んだ本は人々の心を救います。「おまえが本を選ぶんじゃない。本がおまえを選ぶんだ」は名言。図書館を舞台にした物語が意外にも少ない中で、良質の一冊だと思います。

読書週間企画号
第一弾はいかがでしたか？
次回は学年団の先生方から
推薦いただいた本を
ご紹介します！
COMING SOON